

「戦争」は中国、韓国、「ドイツ・フランス共通教科書」でどのように描かれているか

秋池 盛男

1 はじめに

社会科・地理歴史科教育法を昨年から教えることになった。そこで日本の高校の日本史教科書（山川出版社）と中国、韓国、「ドイツ・フランス共通教科書」で「戦争」がどのように書かれているかを比較する授業を行った。越田 稜氏の「アジアの教科書に書かれた日本の戦争」を参考にして、授業を組み立てた。しかし、越田氏の著作は、1990年のもので約30年前の教科書が比較されている。現在はどのようになっているのかを知る必要があると思い、明石書店の世界の教科書シリーズを読み比べた。以下がその教科書である。

- ・「中国の歴史（中国高等学校歴史教科書）」（2000年版）、
- ・「中国の歴史と社会（中国中学校新設歴史教科書）」（2005年版）
- ・「韓国近現代の歴史（検定韓国高等学校近現代史教科書）」（2003年版）
- ・「韓国の歴史教科書（高等学校韓国史）」（2011年版）
- ・「ドイツ・フランス共通歴史教科書（近現代史）」（2008年版）
- ・日本の高校の教科書は山川出版社の「詳説日本史B」（2016年版）



2 近現代史重視の外国教科書

外国の教科書と日本の教科書を比較して最初に感じたことは、教科書の分量の違いである。中国の高校の歴史教科書は、900ページ近くある。「ドイツ・フランス共通歴史教科書」は、3巻に分かれており、それぞれ350～400ページもある。第2巻の近現代史の部分は、ウィーン会議から第二次世界大戦の終わりの部分までで、400ページ近くある。しかもB5サイズである。韓国の教科書は、約400ページ程度でほぼ日本史の教科書と同じ分量である。

日本の教科書は、分量が少ないわりに収録用語が多いのが特徴だ。油井大三郎氏「転換期の歴史教育と東アジアの歴史対話」（2019年「世界」3月号）によれば1950年代には世界史も日本史も1500語前後であったものが、現行の



教科書では、3600 語前後になっているという。

実際、山川出版の詳説日本史の索引に収録された用語を数えてみたら、約 3600 に達した。比較的薄い教科書に多くの歴史用語・歴史人物が詰まっているので、教科書は読み物として、無味乾燥だ。多くの高校で山川の日本史教科書が使われているが、山川の教科書を読んで、歴史をおもしろいと思う生徒がどれだけいるだろうか。油井氏が指摘するように大学入試で細かい用語の暗記力を問う問題が出され、教科書の収録用語が増えた結果、生徒は歴史を暗記科目としてとらえ、歴史嫌いの生徒が増える結果になってしまった。大学生の多くがつまらない授業の典型として、教科書を暗記させたり、教科書を朗読させたりする授業をあげていた。

さらに中国、韓国、「ドイツ・フランス教科書」と日本の教科書の際立った相違点は、日本以外の教科書が圧倒的に、近現代史重視であることである。中国の高校教科書では、約 900 ページのうち、550 ページ以上がアヘン戦争以後の近現代史にあてられている。「中国の歴史」の場合）韓国の教科書も 400 ページのうち約 300 ページは 1875 年の江華島事件以後の歴史が記されている。「韓国の歴史教科書」の場合）「ドイツ・フランス共通歴史教科書」に至ってはさらに徹底している。ギリシアにおける民主主義～フランス革命までが 1 冊、2 冊目は、ウィーン会議から 1945 年までのヨーロッパと世界となっている。そして 3 冊目が 1945 年以後のヨーロッパと世界となっている。それぞれが 300～400 ページと分厚いのである。

日本の教科書の場合、明治維新以後の近現代史は、約 3 分の 1 程度の分量（約 160 ページ）を占めるに過ぎない。「すべての歴史は『現代史』である」（クローチェ）という言葉があるが、日本の学校教育では現代史の学習が決定的に不足している。

3 南京大虐殺と 731 部隊の記述を比較する

学生に読んでおくようにと配った資料は、日本のものは山川出版「詳説日本史 B」の満州事変（P 345～346 の一部）と南京事件（P 353 の一部）、731 部隊（P 365 の一部）である。すべて合わせても 1 ページと 3 分の 1 にも満たない。一方中国の教科書は「中国の歴史と社会」（2005 年版）の第五課「万民の心を 1 つにした抗日戦争」（P 287～293）である。6 ページ分にあたる。

まず、「日本の教科書」の南京大虐殺事件（南京事件）、731 部隊の記述を見てみよう。

- 日本はつぎつぎと大軍を投入し、年末には国民政府の首都南京を占領した。 （本文）
南京陥落の前後、日本軍は市内外で略奪・暴行を繰り返したうえ、多数の中国人一般住民（婦女子を含む）および捕虜を殺害した（南京事件）。 （欄外）
- とくに、中国共産党が華北の農村地帯に広く抗日根拠地（解放区）を組織してゲリラ戦を展開したのに対し、日本軍は抗日ゲリラに対する大掃討作戦（中国はこれを三光作戦と呼んだ）を実施し、一般の住民にも多大の被害を与えた。 （本文）

中国戦線では毒ガスも使用され、満州などにおかれた日本軍施設では毒ガスや細菌兵器の研究が行われた。満州のハルピンには、731 部隊と呼ばれる細菌研究の特殊部隊（石井四郎中将ら）がおかれ、中国人やソ連の捕虜を使った生体実験が行われた。 （欄外）

日本の教科書はすべて引用してもこれだけである。重大事件があまりにもそっけなく、しかも欄外の小

さな文字で書かれ、「大虐殺」という言葉さえない。

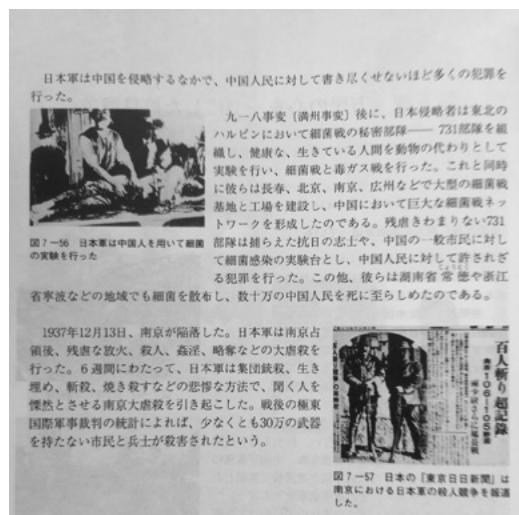
一方、「中国中学校新設歴史教科書」は南京大虐殺事件を次のように記している。

- ・1937年12月13日、南京が陥落した。日本軍は南京占領後、残酷な放火、殺人、姦淫、略奪などの大虐殺を行った。6週間にわたって、日本軍は集団銃殺、生き埋め、斬殺、焼き殺すなどの悲惨な方法で、聞く人を慄然とさせる南京大虐殺を引き起こした。戦後の極東国際軍事裁判の統計によれば、少なくとも30万の武器を持たない市民と兵士が殺害された。

この本文の他に、「読書カード」として、当時、南京のドイツ大使館による報告が資料として載せられているほか、写真として、『東京日日新聞』の「百人切り超記録」の記事がある。

- ・九一八事変後に、日本の侵略者は東北のハルピンにおいて細菌戦の秘密部隊—731部隊を組織し、健康な、生きている人間を動物の代わりとして実験を行い、細菌戦と毒ガス戦を行った。(中略) 残虐極まりない731部隊は捕らえられた抗日の志士や中国の一般市民に対して、細菌感染の実験台として、中国人民に対して許されざる犯罪を行った。こうした叙述の他に、日本軍が中国人を用いて行った細菌実験の写真も載せられている。

また中国の教科書では、反日救国デモの写真や行進中の義勇軍戦士の写真、1936年の西安事件の詳しい叙述など、日本の侵略に対する中国の抗日戦争についても輝かしい歴史として書かれている。



「韓国近現代史の教科書」より

4 学生たちは日本と中国の教科書をどのように評価したか

学生たちには、資料を読むことと次のような間に自分の意見をまとめておくように前回の授業で指示しておいた。それを発表させながら授業を進行しようとした。しかし実際は、ほとんどの学生がまとめてなかったので、授業中に書いてもらう事にした。

まず授業の最初に、南京虐殺や731部隊について高校の日本史の授業でどのようなことを学んだ記憶があるかと尋ねた。しかし、授業で詳しく学んで記憶のある学生は9人中1人もいなかった。731部隊については言葉自体について知らなかったという学生もいた。したがって、南京大虐殺や731部隊について具体的に説明できる学生は一人もいなかった。

最初の間は、「日本の教科書と中国の教科書を読み比べて、気づいたことを箇条書きにしてみよう。」というものである。学生からは次のような感想や意見が出された。

- ① 日本の教科書は、記述が少なく、事実をただ客観的に書いている。これに対して、中国の教科書は極めて具体的で日本の残虐行為などの写真を載せている。日本がひどい行為を行ったことが書いてある。中

国の教科書は、虐殺など日本に悪い印象を多く与えるような言葉をたくさん使っていると思った。

- ② 中国は主観(思想)的な面が強く、反日感がある。 (OT)
- ③ 中国の方は勢いを持って書かれている。日本は過去のこととして、中国は今も日本への恨みが伝わるように書かれている印象。 (TH)
次に「両国の相違を踏まえたうえで、日本の教科書の記述についてどう考えますか。あなたの意見を述べなさい。」という問いに対しての意見を発表させた。
- ④ 中国の教科書の記述は、感情的で日本がひどいことをしたと詳しく書いてあるので、この教科書で学ぶと、日本に対する見方が悪くなるのではないか。
- ⑤ 日本の日本史教科書は客観的に事実を述べているので、中国について悪く考えることはない。
- ⑥ 中国の日本に対する文面は、日本が悪いことをしたのはもちろんだが、少しオーバーに書いてあるところがあると思うので、日本の教科書のように事実を淡々と書くぐらいで良いのではないかと思います。 (ON)
- ⑦ 中国の教科書と比べて、確かに内容は簡単に書かれているが、逆に要点はしっかり押さえられていてわかりやすい。

学生たちの意見には、中国の教科書が「日本に悪い印象を多く与えるような言葉をたくさん使っている」、「主観(思想)的な面が強く、反日感がある」、「中国は今も日本への恨みが伝わるように書かれている」「日本が悪いことをしたのはもちろんだが、少しオーバーに書いてあるところがあると思う」などの批判的、否定的な意見が多かった。そして、「日本の日本史教科書は客観的に事実を述べているので、中国について悪く考えることはない」などと、むしろ日本の教科書を肯定的に評価する意見が多かった。

こうした意見が多かったことは、意外であった。しかしよく考えてみると今日マスコミで流されている情報は、中国の反日デモ、尖閣諸島問題・従軍慰安婦問題・徴用工問題などで中国、韓国に非があり、日本の方が正しいという報道が圧倒的に多い。そうした中で、上記のような意見を多くの学生が持つようになったのだといえる。しかし、それでよいのであろうか。

ただし、次のような意見もあった。

- ⑧ 日本でも広島長崎の原爆投下については詳しく書いてある。中国は被害者なので、その被害を詳しく書いているのではないか。
- ⑨ 日本が加害者であることを教える内容を加えるべきだと持った。 (C・C)
- ⑩ 中国や韓国と違って、日本は他国に、例えば言語を変えられるほど強い統治をされたことがないので、中国の感情的(?)な書き方を全面的に否定することはできないと思う。しかし、中国のような強い書き方は子どもたちに強い印象を与えてしまって、目が曇ってしまいそうだ。これは戦中期の日本の教科書や教育みたいだ。大人に対してならまだしも、教師の言葉を素直に受け入れてしまう子供に使うのは賛成できない。 (TH)

この三つの意見は、被害者の痛みを思いをはせ「日本が加害者であることを教える内容を加えるべきだ」と日本の教科書の問題点を指摘した点は救われる思いだ。だが、最後の意見は、「中国のような強い書き方は子どもたちに強い印象を与えてしまって、目が曇ってしまいそうだ。」と日本の戦前期の教科書や教育と

の類似を指摘している。確かに、そうした面はあるかもしれない。しかし私としては、その前に日本が中国にどのような加害責任があるかを自覚する必要があると考えた。

5 韓国併合、3・1独立運動、従軍慰安婦の記述を比較する

韓国と日本の教科書で比較したのは、日露戦争後の国際関係の「韓国併合」の部分（P 296）と「三・一独立運動」の部分（P 296～297）であった。韓国の教科書は「韓国近現代の歴史」の「民族の受難」（P 142～143）「民族抹殺統治」（P 146～147）「まだ進行中の軍隊慰安婦論争」（154～155）「わが民族の独立の意志を全世界に知らせた3・1運動」（P 160～161）であった。

従軍慰安婦の問題について学生たちに聞いてみると、これも学生9人の全員が高校の授業で詳しくやった記憶がないので、どういうものを具体的に説明できなかつた。従軍慰安婦は、教科書に載っているのですかという質問があったが、山川出版ではP 365の欄外に次の記述がある。「朝鮮では、1943年、台湾では、1944年徴兵制が施行された（中略）戦地に設置された「慰安施設」には、朝鮮・中国・フィリピンなどから女性が集められた。（いわゆる従軍慰安婦）」

歴史教育者協議会が実施した近現代史アンケートによると「従軍慰安婦」という言葉を知っていると答えた高校生は1994年71%、2001年61%、2006年44%、2011年32%、2013年28%と約20年にわたって低下の一途をたどっている。2013年の時点で4人に1人ぐらいしか知らないことになっているが、現在はさらに割合が低下している可能性がある。質問は従軍慰安婦という「言葉」を知っているかというのであるから、具体的に従軍慰安婦がどのようなものであるかと説明できるものはさらに少ないと考えられる。成城大学の学生たちの認識は、今の大学生の平均的なものではないかと推察される。

「両国の相違を踏まえたうえで、日本の教科書の記述についてどう考えますか。あなたの意見を述べなさい。」という問いに対して学生たちの意見は次のようなものであった。

従軍慰安婦について日本の教科書に詳しく載っていないのは、文書の史料がほとんどなく、確実なことがわからないからではないかという学生の発言があった。私は、文書が少ないのは、敗戦直後日本軍が、従軍慰安婦に関する資料を証拠隠滅のため焼却してしまったためであることを指摘した。しかし全くないわけではなく、歴史家の調査で、軍が従軍慰安婦の施設をつくらせていたという事実を示す史料が見つかっていることを指摘するとともに、慰安婦にされた人々の多くの証言も証拠となっている事を指摘した。

さらに学生の意見をあげてみよう。

- ⑪ 韓国の教科書では、このような記述があるから徴用工に対する補償の請求や天皇に謝罪せよという発言が出るのではないか。
- ⑫ 以前、テレビの池上彰の番組で日本は日韓条約に基づき、韓国に経済援助を行い、そのお金で韓国は経済的に急成長できたという事実をあげ、日本への韓国の批判は正しくないという意見



「韓国近現代史の教科書」より

を述べていた。

- ⑬ 日本では民族意識的なことはあまり意識されていないと思うが、韓国の教科書は、民族意識が前面に出されていると思った。日本国民だけが日本の学校で授業を受けるわけではないので、民族意識を前面に出しすぎるのはどうかと思った。その点については日本の方がいいと感じた。 (K・Y)

⑪～⑫の意見は、いずれも韓国の教科書に批判的な意見を述べている。テレビ、新聞、ネットでは徴用工問題で、日本は1965年の日韓協定で「解決済み」とであるという政府の立場を支持するものが圧倒的に多い。学生たちはそうしたマスコミの影響を強く受けている。池上彰氏の意見を私は学生の意見によってはじめて知ったが、こうした意見は、日本の韓国に対する植民地支配の深い反省もなく、韓国の人々に恩を売るような言い方で、全く認められない。しかし、韓国にたいする植民地支配や皇民化施策、従軍慰安婦問題の実態をよく知らない人たちが聞けば納得し、徴用工問題で個人補償を要求したり、天皇に謝罪を要求したりするのが不当であると考えてるのであろう。

⑬の意見は、一般的にはまともで穏当なものだとは思いますが、韓国の教科書がなぜ「民族意識を前面に」出さざるを得なかったのかを考えてほしかった。日本の朝鮮侵略と植民地支配の下で、韓国の教科書の言葉を借りれば「民族抹殺統治」を受けて民族の誇りを奪われた人が、民族として独立することがいかに切実な要求であったかに思いをはせられるようになってほしい。中国の教科書においても同様なことが言える。1949年の中華人民共和国建国の時に、毛沢東が「わが民族は、二度と再び侮辱される民族とはならない。」と宣言したが、中国の教科書の近現代史の叙述はまさに、毛沢東のこの言葉がひしひしと感じられる。アヘン戦争以来の、中国の半植民地化の苦難と外国との（後半においては日本との）戦いの歴史が中心に据えられている。

また次のような発言もあった。

- ⑭ 一方、韓国の教科書で従軍慰安婦の証言を読み、日本人がこんなひどいことをしてという事を今まで知らず、驚いた。 (C・C)
- ⑮ 高校を卒業してから初めて、従軍慰安婦の問題を知った。日本ではニュースしか細かい問題を取り扱っておらず、まずこの問題が何なのかすら知らない生徒がたくさんいると思う。まずどのようなことがあったのか知ることから始めなければならない。私はこの問題は事実であるし、戦後責任として負う責任を感じているが、従軍慰安婦だった年齢を考えても時間の問題であるように思う。 (K・K)
- ⑯ 加害者側の国にとって、不都合なことは書かないか、欄外に書かれてあるかのどちらかだったと思った。 (N・N)

⑭～⑯の意見は日本の韓国に対する加害の歴史を直視し、中学や高校の歴史教育の問題点を指摘している。現在日本と韓国は従軍慰安婦問題の日韓合意をめぐる問題、「徴用工」問題、輸出手続きを簡略化できる「旧ホワイト国」（輸出優遇国）のリストから韓国を除外する政令を出し、輸出規制に踏み切ったことなどで、最悪な状態になりつつある。ドイツは第二次世界大戦でヒトラーのファシズム体制の下ヨーロッパを侵略したが、現在はEUのリーダーとなり、ヨーロッパ諸国と友好な関係を結んでいる。ところが日本は中国、韓国、北朝鮮のどの国とも友好とは言えない状態にある。ましてや東アジア共同体を結成し、日本がそのリーダーとなるようには事には全くなっていない。

6、ドイツの教科書との比較

「ドイツ・フランス共通歴史教科書」については、第一次世界大戦、第二次世界大戦を互いに敵として戦った両国が共通の教科書をつくった点がまず高く評価されなければならない。これまで日中韓3国共通歴史教材委員会の「未来をひらく歴史」や「新しい東アジアの近現代史」（上・下）が発行され、日本と中国と韓国で共通の近現代史の記述を試みているが、これは一般の歴史書として発行されているにすぎない。

ドイツのナチス政権が行った侵略、ユダヤ人などに対する迫害と虐殺の事実を具体的にそして極めてリアルに叙述した点が日本の教科書と全く異なる。特に第6部第4課の「ナチス体制のドイツの暴力、テロ、抑圧」（P 266～268）、第7部の資料「ゲットー、ポグロム、処刑—ユダヤ人に対する民族抹殺の第一段階」（P 332～334）、第3課「強制収容所の世界」（P 334～335）、資料「アウシュヴィッツ」（P 336～337）など極めて具体的な叙述がなされている。日本では数行の抽象的な叙述で触れられるに過ぎない加害の歴史が、数十ページにわたって延々と述べられている。（学生たちに資料として提供したのはその一部分である。）生き残った被害者の証言も資料としてたくさん載せられている。そして迫害や虐殺の現場をリアルに示す大きな写真が何枚もある。日本の教科書では南京大虐殺や731部隊の写真は一切載っていない。

「ドイツの教科書と日本の教科書を比較して、戦争の記述にどのような相違があると考えますか。あなたの意見を書きなさい。」という指示に対する学生たちの意見は次のようなものであった。

- ⑰ 日本は自分が不都合な点は隠し、被害を受けた際の出来事を多く記載しているが、ドイツは自分の罪を潔く認めているため、私は圧倒的にドイツの方が良いと思った。その方が歴史に対して本気に向き合えると思った。 (N・M)
- ⑱ ドイツでは自国がした残虐行為について詳細すぎるほどに書いていたり、日本では教科書には載せられないくらい生々しい写真を使って悲惨さが伝わるものになっている。 (O・T)
- ⑲ 体験記のような個人の文が載っている点が大きく異なると思いました。またナチスについても当事国という事もあり、内容がかなり詳しく書かれていると思った。 (K・Y)
- ⑳ 冒頭にはっきり課題を提示させ、何を学習するかわかりやすくなっている。また著者が歴史を記述するというよりは、資料を用いて生徒にも一緒に考えさせるような形になっている。 (K・K)
- ㉑ ヨーロッパの入試問題を新聞か何かで見た時、単語や人名を知っているかを問うものではなく、回答者に考えて、文章（意見？）を書かせる問題が多くあったのを思い出しました。ヨーロッパでは学校の勉強を通して、深く物事を考えられるような人を育てるようとしているのだと思う。その考え方が、このように歴史を赤裸々に記し、良いことも悪いことも詳しく明確に書くことにつながっているのだと感じた。 (T・H)



「ドイツ・フランス教科書」より

概ね学生たちは、「ドイツ・フランス共通歴史教科書」でドイツの加害が極めて具体的に書いてあり、証言や写真なども積極的に取り入れていることに肯定的な意見が支配的であった。学生たちは、やはり加害の事実であっても、歴史的な事実を知ることが重要だと思っている。そしてそれが、「歴史に対して本気で向き合う」ことだと考えている。

さらに、日本の歴史教育と比較しながら、「資料を用いて生徒にも一緒に考えさせるような形になっている」という点に注目している学生の意見や「単語や人名を知っているかを問うものではなく、回答者に考えて、文章(意見?)を書かせる問題」を重視するドイツなどのヨーロッパ諸国の入試問題に注目している学生の意見もあった。こうした鋭い指摘が出てきたことは私は非常にうれしかった。

「ドイツ・フランス共通教科書」で歴史を学習していればアウシュヴィッツについて授業であまり学習した記憶がないとか、具体的にどういうことがあったか語れない、あるいはアウシュヴィッツという言葉さえ知らないというドイツの高校生は非常に少ないに違いない。南京大虐殺や731部隊について、授業でほとんど学習した記憶がないという高校生や大学生も中国で少数派であろう。徴用工(強制連行)や従軍慰安婦(軍隊慰安婦)の問題について授業でほとんど学習した記憶がないという高校生や大学生も韓国では少数派であろう。

一方日本の高校生や大学生の多くが、南京大虐殺や731部隊、徴用工や従軍慰安婦について、詳しく学習した記憶がなく、どのようなことかを詳しく語れない。なぜそのようになってしまったのか。原因として次の3点考えられる。第1、近現代の歴史を教える時間が少ない。第2、南京大虐殺や従軍慰安婦については、教科書の欄外でしか取り上げられていない、写真や証言などの資料を入れて詳しく説明している教科書は少ない。特に多くの学校で使用している山川出版の現状についてはすでにふれたとおりである。第3にセンター試験に日本の侵略・加害の歴史はあまり出題されない。こうした現状は、これからの日中、日韓の友好関係を構築していくうえで、きわめて深刻な問題としてとらえなくてはならないと考える。

6 まとめ

日本の日本史教科書と中国、韓国、ドイツフランス共通共通教科書の戦争に関する記述を比較する授業を行った後で、福島宏希氏の『『自虐史観』とは何か?』(<https://blogos.com/article/170361/>)というネット上に発表された論文を学生に読ませ、これについて意見を書いてもらった。福島氏の論文は、「全体的に、戦後教育において、日教組を中心として、著しく近代日本を貶める教育が行われてきた」という観点から、戦後の歴史教育を「自虐史観」として批判する立場から書かれている。学生たちは、「ドイツ・フランス共通歴史教科書」の記述から学んだ後で、福島氏の「自虐史観」批判に対して、次のように述べた。

- ② 福島氏は「教育を通じて愛国心を涵養し、子どもたちに自国に対する自信をつけさせることが大切であるのに、教育を通じて自国に対する自信を喪失させる内容ばかり取り上げている。」と自虐史観を批判しているが、資料のように実際に日本人の証言や数字で明らかになっていることまで否定する必要はないと思える。逆に悪あがきのようにも見える。(こうした考えは、)事実に向き合い、改めて同じ失敗を犯さないようにしようという反省がない。 (K・K)

- ②③ 私は自虐史観を持つことは個人の自由だと思った。事実を自分なりに理解したうえで、自分の意見を持つべきだと思った。自虐史観を持つ持たないよりも、それ以前に事実と向き合ってこれからどうしていくかを考えることが大切だと思った。良い面悪い面の両方の側面を見ていく方がいいと思った。

(N・M)

中国、韓国、ドイツ・フランスの共通教科書を読み比べた後、同様の意見が多数を占めた。この学習を経て、学生は歴史的事実に向き合うことの重要性を指摘するようになった。学生の中にある、こうした「本気で歴史に向き合う」態度こそ、日中・日韓の関係を改善する基本的な条件となるであろう。

※学生の意見で、イニシャルの入っていないものは授業中の発言で、記録が残っていないものです。